



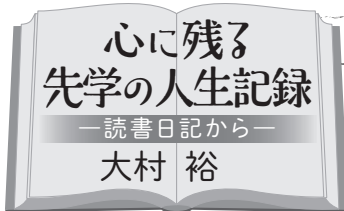
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.223
2022.4.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第27回

白川 静『回思九十年』(平凡社 2000年)

本書は中国古代文学、漢字の字源研究の大家として名高い白川静博士(1910~2006)の自伝、ならびに後学の研究者や文化人との対談記録集である。白川博士は考古学研究者ではないが、この方面への目配りも怠りないようであるし、考古学者との交流も多い(坪井良平・角田文衛・三森定男・末永雅雄・有光教一・岡崎敬等)。何よりも学問への姿勢が私には大きな刺激となっているので、紹介する次第である。

白川静は1910(明治43)年に福井市で出生。家業は洋服屋であった。生家は決して裕福ではなく、小学校尋常高等科に1学期だけ通わせてもらった後、故郷を離れ、大阪にある広瀬徳蔵法律事務所の玄関番として働くことになった。広瀬は大変な蔵書家で、白川はその書庫に入り浸り、『国訳漢文大成』『王道天下の研究』『法律進化論』『実名敬避俗の研究』や明治末~大正期の文学書などを読み漁ったという。なお広瀬の事務所に勤めていた時、一時体を壊して帰郷したことがあったが、その折、生家の近所に住まう「佐々木文苑先生」(県庁の役人)の蔵書を筆写したり、読んだりして漢籍への関心を一層深めたい。これらの経験から、「一生読書の生活をしたい」、「一生読書で暮らすには中学の教師となるのが最もよい」ということに思い至り、夜間商業学校の第二本科に編入して(広瀬事務所にいた頃、一時他の夜間商業学校に在籍していた)、中学校教師の資格取得の足場を固めることになる。

ここを卒業した後、23歳(1933年)の時に立命館大学専門部文学科国漢科に入学する。ちなみに、同じクラスに濱田耕作門下の考古学者・三森定男が在籍していたという。二年生になると、大学の諸事情により、文部省中等教育国語科免許検定試験を受験するよう指示があり、見事合格する。予備試験の倍率だけで10倍であったというから、大変な難関を突破したことになる。三年生になると今度は大学の常務理事から立命館中学の教諭になるよう指示が来る。専門部は在籍半ばで卒業の取り扱いとなり、念願の私立中学校国漢科の教員となったのであった。ここでは面白いエピソードがある。新任教員の歓迎会の折、床の間に一見して読みがたい字が書かれた「一聯の書」が掛けられてあった。そこで古参の老教員が白川にからかいをかけ、「これが読めるならおれの膳を進ぜよう」と言ってきた。その書は「初唐の王勃の『滕王閣序』という四六駢儷文の名作」であったという。白川はこれを既に暗誦していたので、すらすらと読み下し、老年の国語教師をぎゃふんと言わせたというのである。

1941(昭和16)年、立命館大学に法文学部が設置されると、学生数が少ない故を以て、中学教師在職のまま法文学部漢文学科に進学することを当局から命令される。そしてこの2年後、またまた法文学部を繰り上げ卒業となり、予科教授に引き上げられたのであった(1943年)。その後は専門部教授(1944年)・文学部助教授(1945年)を歴任して行く。白川の温厚篤実な人柄、独力で培った抜群の漢学の素養

が功を奏し、周囲から格別の引き立てがあったのだろう。専門部に在学中、白川が提出した漢文の答案の素晴らしさに瞠目した加藤盛一教授が広島文理科大学に転身する折、白川を助手として招聘しようとした程である。しかし晴れて文学部教授となれたのは、助教授就任から9年目(1954年)のことである。昇任が遅れた理由の一つは、発表した論文が少なかったことらしい。発表論文が約30篇に達したとき、ようやく教授会の推薦を受けて教授となったのであった。発表論文が少なかったのは、当事論文を発表出来る機関誌が白川には立命館大学関係のものしかなかったこと、甲骨学・金文学の分野では、普通の活字にない文字が多かったからである。

その後の大学教員時代の仕事の詳細については紙面の都合上割愛せざるを得ないが、大学教員の末端で仕事をしたことがある私が衷心より感服した事実を紹介しよう。「中国文学史」の講義の場合、一年間で講義する資料を予め謄写版印刷(手書き)でプリントにまとめ(1分冊が140~150頁。合計6分冊)、学生に年度初めに配布して予習させ、これに沿って講義をするのだというのである(「学問の思い出—白川博士を囲んで—」『白川静著作集 12巻』2000年所載)。理想的な講義形式であるが、これを実践することは容易なことではない。白川の仕事は万事、このような調子である。労をいとわず、他人の目の触れないところで黙々と仕事をして実力を蓄え、獲得した成果をマイペースで公表するその姿勢に、私は深い感銘を覚えるのである。大学紛争が盛んな時代(1960年代後半)、立命館大学は殆ど閉鎖状態であったが、白川は研究室に毎日通った。紛争に参加している学生たちは、白川が研究室に通うのを妨げようとはしなかったのである。白川が「エリート」ではなく、苦学して「大家」となった学者であることを彼らは知っており、畏敬の念をもっていただけではなからうか。

立命館大学での仕事から解放された(73歳)後は、朝から書庫にこもり、200字詰め原稿用紙で毎日平均20枚書き続けていたという。かの「字統」・「字訓」・「字通」の「字書三部作」はこうした不断の努力の中で出来上がったのであった。白川の漢字解釈には、素人の私でも首を捻るようなものがあるが、白川の生前、表立った批判は余り出なかったようである(藤堂明保を除く)。陰で冷笑はしても、その膨大な漢学の知識に正面切って対抗しうる斯学研究者が少なかったことが原因だったと私は想像している。

最後に、白川が本書で述べている数々の箴言の一部を列挙する。「学問は、その成果が、本来一般に還元しうるものでなければならぬ」(59頁)。「知識は、すべて疑うことから始まる。疑うことがなくては、本当の知識は得がたい」(82頁)。「知る必要があつてするというのは、ともかく目的意識をもつということです。学術には不可欠な態度です」(121頁)。「多数派とか少数派とかいうのは、(中略)学術には何の関係もないことです」(138頁)。

*巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目次

■心に残る先学の人生記録 —読書日記から— (第27回)	大村 裕 …1	■リレーエッセイ マイ・フェイスバレット・サイト (第216回)	伊沢加奈子 …3
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む (第2回)	山本暉久 …2	■考古学者の書棚「澁澤敬三著作集」全5巻	太田原(川口)潤 …4

考古学の履歴書

考古学とともに歩む(第2回)

山本 暉久

2. 生い立ち、そして考古学の道へ

私は戦後間もない昭和22(1947)年3月23日に生まれた。出生地は、今の新潟県東蒲原郡阿賀町(出生当時は、両鹿瀬村、のちの鹿瀬町)である。父が昭和電工に勤務するサラリーマンで転勤が多く、私が生まれたころは、この地に昭和電工鹿瀬工場があり、そこに勤務していた。この工場の排水に含まれていたメチル水銀が阿賀野川に流れ出し、1965年ころ「新潟水俣病」(「第二水俣病」ともいう)が発生・確認されたことでも知られている。ただ、生まれてまもなく、父は長野県大町、そして小海村(現・小海町)へと転勤し、私の記憶の中には小海での記憶が断片的に残っているだけである。父は、大正元年生まれの石川県羽咋市の出身で東京商科大学(現在の一橋大学)を卒業している。大学時代は、子供のころよく聞かされたが、ボート部に属したスポーツマンであったようだ。戦争へも二度出征している。大学を出ていたが、陸軍の兵卒として上海事変に出征後、太平洋戦争が始まると二度目の応召により南方のラバウルへと派遣され、飛行場建設に従事したが、現地でマラリアに罹患したため病院船で帰国している。太平洋戦争が始まったばかりのころで、そのころは比較的安全に帰国できたようだ。ただ、父は戦争の話はほとんどしなかった。母は東京の大森の出で、母方は、第一次大戦によるいわゆる「大正成金」で、結婚前はだいぶ裕福であった。府立第八高女(現・都立八潮高校)を卒業後、18才で父と結婚した。

家族は両親と、長兄と姉と私の五人家族であった。兄は、わたしと7つ違いの戦前生まれで、姉は二つ上で、私は末っ子であった。戦後生まれの私は、父から大変可愛がられた。だから私が考古学を目指すことについても、なんら反対もせず、むしろ大変理解してくれたように思う。

こうして、私が6才になる前に、父は東京本社へ転勤となり、世田谷の若林にあった社宅へと引越して、小学校の6年間は世田ヶ谷で過ごした。ところが、小学校を卒業する間際に、父はまたまた転勤し、今度は大阪、豊中市へと引越することとなった。この中学時代の大阪での生活は思い出が多い。今は想像できないかもしれないが、中学へ入学して、自己紹介したとき、東京弁で挨拶したらみんなに笑われてしまった。関西弁でないのが奇異であったのだろう。それがトラウマなのか、今も関西のお笑い芸人は好きになれない。当時、それは今もそうかもしれないが、関西人は、東京に対して強烈な対抗意識をもっていたから、東京弁の私を差別したのかもしれない。今に続く、日本列島の東西文化の差を肌で実感することとなったのである。でも、そんなことも中学の3年間を過ごすうちに、すっかり関西弁となってしまう、友達も多くなった。

ところが3年生の卒業間際になって、父は再び東京へ転勤となり、2月に転校することとなった。高校進学を控えていて、地元のだの高校を受験するか考えていたときに、急な転校となり、母の妹が目白に住んでいたの、そこに寄宿しながら、卒業までの短い間、世田谷の若林中学校に通うこととなった。そんな環境の変化なのか、高校受験は第一志望の都立高校は不合格

となり、第二志望校に入学することになってしまった。当時の都立高校の受験は、試験の合格点ラインが決められていて、その基準に達していると、第二志望校へ合格となる仕組みだった。だから、私が都立松原高校に入学したときは、大半の生徒は、第一志望校からの落ち組であった。そのころ家族は世田谷区千歳船橋に転居した。

こうして高校生となったのが、1962(昭和37)年のことであった。私たちの世代は、いわゆる「団塊の世代」と呼ばれた、まさしく競争社会であった。そんななかで、大学へ進むにしても、なにを勉強するのか、将来はどうするのかが問題であった。そのころの私はなぜか日本の歴史について興味をもっていて、漠然と大学は文学部の史学科を目指そうと思っていた。そんなときに、大学で考古学を専攻しようとしたきっかけになったのが、ちょうど高校2年生になる直前に、池袋の西武デパートで開催されていた「日本人のあけぼの」という展示会(写真参照)を見学したことであった。この展示は「目で見る先史時代展」という副題にあるように、日本の旧石器時代から縄文時代文化の変遷、弥生時代の成立までを、遺物を展示してわかりやすく解説したもので、これにいたく感動して、「よし、考古学者になろう!」と決意することとなった。考古学を目指すとする動機は人それぞれであろう。遺物を採集して興味を抱いた、いわゆる「考古ボーイ」がその典型だろうが、私には全くそのような体験もなかったが、そんな不安をいただくことはなかった。

ただ、私は理数系の成績は全くふるわず、当時の国立大学は全教科が受験科目となっており、とても無理だったので、英・国・社(日本史)の3科目での受験が可能であった私立大学を目指すこととなった。当時の大学受験は、入学試験の成績だけで合否が決まる一発勝負の世界であったが、幸い、早稲田大学第一文学部史学科國史専修に1965(昭和40)年4月入学することができ、考古学を学ぶ一歩を踏み出すこととなったのである。



「日本人のあけぼの」展示図録表紙

略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月~1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月~2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英之記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月~2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁護子先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 216

鍋小路遺跡 ～栃木県壬生町

伊沢 加奈子

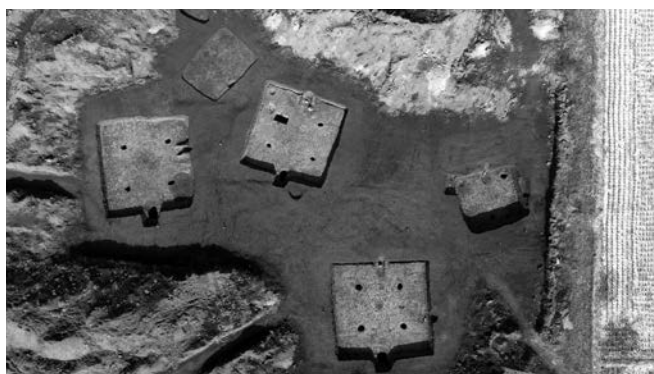
壬生町は栃木県の中央よりやや南、関東平野の北端に位置しています。町は大きく丘陵地、台地、沖積地に区分でき、そのほとんどは標高50～90mの台地からなります。町を南流する3つの河川沿いには先史時代から数多くの集落が営まれ、古墳時代に築造された古墳は約300基を数えます。

今回紹介する鍋小路遺跡は、栃木県壬生町の東側、安塚及び国谷と呼ばれる地区に位置しています。遺跡を含むこの付近一帯は、昭和期に東京から移転したおもちゃ工場を基盤に町づくりが行われた経緯から「おもちゃのまち」と呼ばれています。余談ですが、最寄りの東武宇都宮線の駅も「おもちゃのまち駅」と名付けられ、日本一かわいい駅名ランキング第1位にも選ばれました。

平成の終わり、この地区に外資系大型商業施設を誘致する計画が持ち上がり、令和元年度から令和2年度にかけて3回にわたる調査がおこなわれました。私が壬生町に入庁したのはI次調査がひと段落した令和2年度で、入庁後1週間もたらず次の調査のためのジョレン掛けをした思い出深い遺跡です。

鍋小路遺跡は、隣の下野市との間を流れる姿川右岸に形成された、古墳時代後期を中心とする集落遺跡です。現在は平地のように見えますが、遺跡の南東から北西にかけて姿川からのびる谷が入り込んでいたことが分かっています。当該地一帯は、先述したようなおもちゃ工場をはじめ大規模な工場建設や宅地開発が頻繁に行われており、「これまでおもちゃのまちには歴史が無かった」とも言われていました。

しかしI～Ⅲ次にわたる鍋小路遺跡発掘調査の結果、縄文時代の落とし穴遺構1基、弥生時代後期の竪穴住居址1軒、古墳時代後期の竪穴住居址24軒、奈良・平安時代の住居址10軒、時期不明の井戸1基が確認されました。縄文時代の落とし穴遺構は時期不明ですが、別地点で縄文時代早期の鵜力島台式土器の破片数点が確認されています。弥生時代の竪穴住居内からは、栃木県から茨城県域にかけて分布する二軒屋式の土器や土製耳飾が出土しました。各々この時期の遺物の出土は、町内でもけて多くはないため、今後町の先史時代を考えるうえで貴重な資料となるでしょう。古墳時代の竪穴住居跡は最も多く、通常の竪穴住居跡に加えて、カマドを持たない1辺8mを超える大型の竪穴住居跡も確認されました。また、住居の一边の壁から外方向に張り出すように掘られた貯蔵穴、通称「張り出しピット」と呼称される特徴的な遺構を持った竪穴住居跡も4軒見つかっています。続く歴史時代の竪穴住居跡からは、「厨」と書かれた墨書土器と共に、鉄製の鎌や紡錘車出土しました。



▲張り出しピットを持つ竪穴住居跡

加えて、今回の大きな成果の一つとして、太平洋戦争期の「国谷飛行場」建設に伴う整地層が確認されたことが挙げられます。昭和19(1944)年、それまで宇都宮の清原飛行場でおこなっていた訓練の一部が壬生に移り、鍋小路遺跡を含む一帯約2km四方の土地に陸軍飛行場が建設されました。姿川から延びる谷があったことは既に述べましたが、その谷は戦時中の飛行場建設に伴い埋め立てられたのです。調査区の断面ではロームの再堆積層を確認したほか、発掘調査中には木杭らしきものや伐根された根が見つかりました。通常は取り除くべき木がそのまま埋められていたことを考えると、よほど工事を急いでいたのではないかと推察されます。事実、記録によると(整備が間に合わなかったのか)滑走路は芝生敷だったそうです。地元の戦争経験者の方のお話では、当時は地元を中心に多くの人が飛行場建設に参加し、埋め立て時には姿川沿いに造られた古墳も数多く破壊されたといわれています。終戦後米軍によって撮影された航空写真を見ると、削られてロームが剥きだしとなった台地が白く映り、円墳の周溝と思われる環状のしみが転々と確認できます。戦後は開拓地として活用され、現在は宅地化により飛行場の痕跡として残っているものは、兵舎の門柱や県の近代化遺産にも指定されている防火水槽などごく一部です。そう考えると、現在の景観にも関わる谷埋め立て時の整地層の確認は、壬生町の戦争史を語るうえで大変意義あるものだと思います。

また、鍋小路遺跡の発掘調査は、普及啓発の面でも充実した活動を行えたと思います。遺跡から徒歩圏内に小学校があったことから児童の体験発掘をご提案しに伺ったところ二つ返事で快諾頂き、なんと全校児童約300名が体験発掘に訪れてくれました。学年によって習熟度が大きく異なるため解説の言葉選びには苦労しましたが、皆次々と見つかる土器片に大喜びしていました。この体験をきっかけに考古学に興味を持ち、親を巻き込んで博物館や遺跡巡りをする子も現れ、担当者として非常に嬉しく思いました。

その後は出土物の一部を小学校の教室で展示したり、令和2年には壬生町立歴史民俗資料館にて小中学生の夏休みに合わせた「みぶほる! 2021 壬生町の発掘調査速報展」というミニ展示を企画して、多くの人々に見ていただきました。今後は内容をさらにパワーアップさせ「おもちゃのまちの歴史」として通史的に展示し、当該地の歴史をより多くの人に知ってもらいたいと考えています。

参考文献:

壬生町1987「壬生町史 通史編」壬生町史編纂委員会
壬生町1987「壬生町史 資料編 原始古代・中世」壬生町史編纂委員会

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは岩永祐貴さんです。



▲小学校体験発掘

考古学者の書棚

「澁澤敬三著作集」全5巻

澁澤敬三 著(網野善彦・澁澤雅英他編)／平凡社(1992~1993) ————— 太田原(川口) 潤

あえてというわけではないが、本稿では考古学研究者からすると必ずしも身近とは言えない澁澤敬三の著作集を取り上げてみる。

澁澤敬三は、早くから生物学を志望していたものの、祖父栄一の懇請もあり、銀行家の道を歩んだ。後に日銀総裁、大蔵大臣も務めた一方、多くの学問、学者を物心両面で支え、宮本常一はじめ、あまたの人材を育てた。また、埋もれた資料を世に出すとともに、自らも多忙な合間を縫って研究を続けた。社会人としての出発と前後して1821年に立ち上げたアチックミュージアムソサエティ(後の日本常民文化研究所)は、神奈川大学日本常民文化研究所へと受け継がれ、屋根裏部屋から始まった澁澤の民具コレクションは、現在の国立民族学博物館の基礎をなしている。民具学のパイオニアでもある澁澤の時の種は現在も各地で息づいているのだ。

著作集は全5巻で、澁澤が中学の頃から亡くなるまでの挨拶文、随筆から論文に至るまで、様々な著作が収録されている。読むと視野が広がる思いに駆られることがある。

1 澁澤敬三とジョン・ラボック

意外な感もあるが、澁澤は1914(大正3)年、中学5年の時にラボックのことを書いている。『我が尊敬するエーペリー卿の略伝と、卿の蟻・蜂に関する研究の一部について』(第5巻所収)と題されているため見過ごされがちだが、エーペリー卿とはジョン・ラボックのことだ。多彩な活躍をしたラボックは、考古学においては旧石器時代の概念の提唱者として知られる。その概要はモースの講演により既に日本にも紹介されていたとは言え、知る人は限定的だったはずだ。戦前の旧石器存否論争にも先立つこの時期に、18歳の澁澤がラボックに関する論文を書いていたことに驚く。

調べてみるとラボックの著作は、明治、大正期の日本にも少なからず入っていた。澁澤は原書にもあたりながら、銀行家、政治家にして、さまざまな学問分野で活躍したラボックの姿と彼の生物学研究、そしてそれらに向かう姿勢に注目したのだった。澁澤は論文の終盤で、政治の話ができない医学者とか、サイエンスの話ができない政治家は過去の産物だとし、「将来、学者たり政治家たらんとするものは自分の能力相応に自分の専門以外のことに興味を持たねばならぬ」と記している。当時の澁澤は祖父栄一の後継問題もあり悩み多い時期にあったが、ラボックのありように一筋の光明を見いだしたものと思われる。後の澁澤の歩みはラボックに重なるものともなった。

2 澁澤敬三と水産史研究

澁澤は出勤前に自らの研究を続け、帰宅後にはアチック同人との議論を大事にした。既存の学問に欠けている部分に目を向け、古文書や伝承より非文字資料の、畑作や稲作より漁撈の研究を推し進めた。第1巻には「式内水産物需給試考」、「式内魚名」など、第2巻には「日本魚名の研究」、「日本釣魚技術史小考」が収まる。公務繁多の中、他者の研究を支えるだけでなく、自身でもこれだけの質の研究を行っていたのだ。考古学にとっ

ても示唆に富む研究で、私も折に触れ参照する。また、『豆州内浦漁民史料』や『日本魚名集覧』は挨拶文や序文のみの掲載だが(第3巻)、これらはアチック同人との共同作業の結実でもあった。

3 「ハーモニアス・デヴェローPMENT」

澁澤の学問には協業志向があった。それまでの活動を振り返って1935年に書かれた「アチック根源の記」(第3巻)に、「人格的に平等にしてしかも職業的に専攻に性格に相異なった人々の力が仲良き一群として働くとき、その総和が数学的以上の価値を示す喜びを皆で共に味わいたい。ティームワークのハーモニアス・デヴェローPMENTだ」とある。澁澤が主導した九学会連合もその延長上にあるものだろう。私も知らぬ間にその恩恵に浴していた。これまでしばしば引用してきた青森県長者久保遺跡の調査はまさに九学会連合による北半島調査の賜物だった。

近年、考古学においても学際的な研究が大きく進展している。しかし、一見そう見えながらも、単にアウトソーシングの組み合わせと感ずることもある。「自分の能力相応に自分の専門以外のことに興味を持たねば」、真の「ティームワークのハーモニアス・デヴェローPMENT」は成しえないということだろうか。

4 「仰臥40年の所産」

澁澤は多くの著作に序文を寄せている。「歩けぬ探訪者」と題したそれは『日本星座方言資料』への、「仰臥40年の所産」と題したそれは『菅江真澄未刊文献集』への序文だ(第3巻)。ともにアチック同人の内田武志の著作に対するものだが、内田の研究への敬意に満ちたものとなっている。後に内田は宮本常一とともに『菅江真澄遊覧記』、『菅江真澄全集』を刊行するが、その研究も不治の病で仰臥したままの状態で成し遂げられたものだ。病状が安定していた訳ではない。時に澁澤の励ましがあり、澁澤や宮本との研究談話が快復のきっかけとなることもあった。宮本の他の著作から知る逸話だが、学問のもつ潜在力の大きさを感じる。澁澤が陰で支えた内田による真澄研究は、民俗学に欠かせないものとなった。真澄は考古資料や埋没家屋も記録している。内田の研究は考古学にも寄与するところとなった。

おわりに

澁澤の研究は大きな困難も乗り越えながらなされた。考古学研究者も時に利用する『絵巻物による日本常民生活絵引き』もそうだ。「絵引きは作れぬものか」(第3巻)にその経緯が記されている。

澁澤は1963年、67歳で旅立った。寄せられた追悼文からラボックさながらの多彩な活躍ぶりが伝わってくる。追悼講演会では講師の一人として八幡一郎も壇に立った。目に見えない澁澤の貢献が考古学にも多々あったことが窺われる。

アルカ通信 No.223

発行日 2022年4月1日
企 画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp